あぶらむ通信

第26号　2004年12月　　あぶらむの会発行
〒509－4121　飛騨国府町宇津江
TEL 0577-72-4219　FAX 0577-72-4494
E-mail：abram@kokufu.net
URL http://www.kokkufu.net/～abram/

ペルーの土人形
「幼子イエス生れる」

飛騨便り

「2004年天変地異」といえば少々大げさでしょうか。しかし日本全国、けっこう自然界のふるいにかけられ大きく揺すられたような一年でした。あぶらむ通信お手の皆様にはお元気でお過ごしのことと思います。

●台風の爪跡

人間の波動と自然界の波動とはシンクロ（共振）するのでしょうか、我々人間社会にやるせないような事件がおこるとそれに同調するかのように自然界も私たちの生活に大きな痛手を残して行きました。新潟中越大地震の被災者の方々のことを思えば微々たるものですが、台風23号は久しぶりにこの飛騨地方にも大きな爪跡を残して行きました。超大型台風として本土上陸した23号は、10月19、20日の２日間大雨をふらせました。このため近辺の大小の河川が氾濫し、山崩れがおこったりで、国府、高山だけでも死者、行方不明者３名という犠牲者を出しました。またＪＲ高山線は地元古川駅と猪谷（富山）間で17ヶ所の橋脚が流出し、復旧には数年かかるといわれています。

人間誰しも自分だけは大丈夫と思っています。私もこれまでそう思ってきましたがこの台風の大雨であぶらむの里も裏山が崩れ土石流となり、その一部が宿のボイラー室にまで達しました。幸い被害は軽微でしたが今後に課題が残されたかたちとなりました。この時の雨量はこれまでに経験した範囲内だったように思うのですが、それまでに続いた長雨がボデーブローのようにきいていたものと思われます。

９月18日に稲刈りをし、10月７日必死な思いで脱穀しましたが、何とハサかけ天日干しのその間に晴れた日はたった三日間だけでほとんど雨ばかり。ハサがけしていた稲から芽が出るような状態でした。この地に来て稲作を初めて17年になりますが、このような惨たんたる状態は初めてでした。このように９月から10月中旬にかけての長雨が下地となり、台風23号のまとまった雨で山崩れとなってしまったのです。自然界の恐ろしさの一端をかいま見たようでした。

旧約聖書には、その昔ユダヤの人々は災い（天災疫病、敵の侵略等）をうけるとまず第一に、自分は神の道をはずれ罪を犯していないか、自分の日々の行いを問い正したと記されています。右を向いても左を向いてもやるせないような事件ばかりの私たちの社会、今年うけた大きな災害を天からの警鐘として、私たち日々の行いを反省してみることが求められているのかもしれません。

●生命の本質ー星野道夫さんの本再読

一日の始まりとはどこの時点なのでしょうか。私の場合、夕食をすませ７時になると「世俗の出来事を見てくる」といつものセリフと共に食卓を離れニュースを見るのですが、10分も見るか見ないかのうちに即身成仏のような姿勢でねむってしまうのです。目がさめるのが深夜１時すぎ、それが私の一日の始まりなのか、まだ前日の続きなのか、とにかく私の一日は始動して行くのです。この深夜から明け方までの時間は至福の一時で、仕事の段取りを考えたり、あぶらむの将来構想を練ったり、手紙書きや本読みなど時間を独り占めしています。ここ数年は本の再読に重点を置き、最近は星野道夫さんの本の再読です。改めていろんなことを考えさせられています。彼のエッセー集「旅をする木」の中に、生命体の本質について

次のような一文があります。

「私たちが生きてゆくということは、誰を犠牲にして自分自身が生きのびるのかという、終りのない日々の選択である。生命体の本質とは、他者を殺して食べることにあるからだ。近代社会の中では見えにくいその約束を、最もストレートに受けとめなければならないのが狩猟民である。約束とは、言いかえれば血の匂いであり、悲しみという言葉に置きかえてもよい。そして、その悲しみの中から生れたものが古代からの神話なのだろう。

動物たちに対する償いと儀式を通し、その霊をなぐさめ、いつかまた戻ってきて、ふたたび犠牲になってくれることを祈るのだ。つまり、この世の掟であるその無言の悲しみに、もし私たちが耳を澄ますことが出来なければ、たとえ一生野山を歩きまわろうとも、机の上で考え続けても、人間と自然との関わりを本当に理解することはできないのではないだろうか。人はその土地に生きる他者の生命を奪い、その血を自分の中にとり入れることで、より深く大地と連なることができる。そしてその行為をやめたとき、人の心はその自然から本質的には離れてゆくのかもしれない。」

数年前よりここあぶらむの里を訪れる子供たちの中に火（炎）を見たことがないという子供たちが増えてきた。無論マッチをすって火をつけるということもやったことがない。マッチをすれば火が恐いのかすぐ手をはなしてしまう。最近の都会の集合住宅では防災上の理由でガスがなくなり電気(磁)調理器にかわっているらしい。火を見たことがないという子供がいる理由がやっとわかった。人間の生存に不可欠な火というものからさえ離れようとしている私たち、コンピューターの操作だけで危機管理ができるのだろうか。アナログ人間である私は子供たちになるべく火にさわらせたいと里のあちこちに火場をつくった。パンやピザを焼く石窯、炭窯や薪をたくサウナ窯、たき火を囲んでの団らん場など、敷地のあちこちで火がたけるようにした。火をじーっと見つめる子供たちの目が生き生きとしてくるから嬉しい。

また米をつくり野菜を育てきつい山仕事を続けるのも、いかに多くの生命によって私たちが生かされているか、自然から離れてはいけないことをここを訪れる人々と共に確認したいからだ。そんな私たちの願いの中で、ここでの生活体験を学びの場として用いてくれる学校が少しづつではあるが増えてきたことはありがたい限りである。これからのあぶらむの大切な仕事（役割）として育てていきたく思っている。

●もうそんな年齢（とし）!? さてどうする

「一つ年上の女房は金のワラジをはいて探せ」、私はそんな高価なワラジをはいて探したのではなく偶然のなせる業。女房は一つ年下の私をどんなワラジをはいて探したのでしょうか。「男のロマンは女のフマン（不満）」という声がきこえてくる今日このごろです。お金に縁のない我家に最近銀行員が足しげくかよってくるのです。何と目的は厚生年金。女房殿は本年より給付開始、私がうけたショックたりや相当なものでした。一年後は自分の

山崩れが土石流となり一部が宿の裏手まで流れてきた。ヘドロのようだった。

ところへ確実にやって来るのです。認めたくない！認められない！しかしどうつっぱてみてもあがいてみても来るものは来るのです。この現実をどのように受けとめればよいのでしょうか。

あぶらむの会を旗上げして17年、この間全く無我夢中で先のことなど考える余裕もなくここまで来てしまった。あぶらむ構想は5年や10年ですぐにどうこうなるものではなく、このまま風呂敷を広げたままで自分の代は終っていけばいいという考えと、それは少し無責任かなァーという自分が、心のどこかでせめぎあっているのです。そんな中で年金給付間近という現実がつきつけられたのだから心中おだやかではなく「さァーどうする」という声が出てくるのです。

前述した星野道夫さんの新しい旅というエッセーにこんな文も出てきます。

「あの頃、ぼくの頭の中はアラスカのことでいっぱいでした。まるで熱病に浮かされたかのようにアラスカへ行くことしか考えていませんでした。磁石も見つからなければ、地図も無いのに、とにかく船出しなければならなかったのです。…しかし、あれから15年いつしか自分自身のアラスカの地図も少しづつ見えてきました。…そして最近、もう一度あの頃の自分に戻れないかとも思うのです。つまり、目の前からスーッとこれまでの地図が消え、磁石も羅針盤も見つからず、とにかく舟だけは出さなければというあの頃の突き動かされるような熱い想いです。そしてたどり着くべき港さえわからない新しい旅です。もしかすると誰の人生もさまざまな意味でそういうことなのかもしれませんね」

磁石も羅針盤も地図もないような中でつくりあげてきたあぶらむの里、彼のおもいに共感する自分がいるのです。この17年余でそれなりの地図ができあがってきたあぶらむの今日このごろです。しかし、その中にあって「あの頃の突き動かされるような熱い想い」がどのようなかたちで今自分の中にあるのか自問自答している今日このごろです。

自分がやらなければならないもう一つの仕事、それが何であるのかわかっていて、ある程度青写真も描けているのですが「大郷博やりまーす」といい出せない自分がいます。年金給付までには腹を決めたいと思っています。もう一仕事ということが決った時、どうかもう一度だけ最後のお力をお貸し下さい。

今号はとりとめもない飛騨便りとなってしまいました。今の私をよくあらわしています。2005年新しい年、どうぞ皆様お一人お一人の上に豊かな平安がありますよう心よりお祈りいたします。

2004年12月

あぶらむの会　代表　大　郷　　博

おしらせ

- **2005年あぶらむ雪祭り**
  2005年2月11日（金）～13日（日）
- **第9回子供から大人までのネパールの旅**
  期間 2005年3月25日～4月5日
- **津軽三味線2代目高橋竹山あぶらむコンサート**
  2005年5月28日（土）
- **アラスカ大自然の旅　企画中**
  期間 7月下旬予定
- **ウィンフィルハーモニー交響楽団首席チェリスト 吉井健太郎チェロコンサート**
  10月下旬予定

※予定のもの、日程が決まり次第ご案内いたします。

「自然の中で思いっきり」

立教小学校教諭　西村　正和

「いつか立教小学校の子どもたちをあぶらむに連れて行きたい。そして豊かな自然の中で価値観を揺さぶるような体験をさせたい！」それは学生時代に大郷先生とフィリピンキャンプやヨットを体験した私の前からの願いでした。そして今年、ついにその念願がかなうことになりました。立教小学校で「バーチャル時代を生きる今の子どもたちに本物の体験を」という趣旨のもと「興味別」「少人数」「体験重視」をポイントに“グローバル・エクスカーション”というプログラムを立ち上げる事になったのです。選ばれた行き先は①北海道　②小笠原　③上高地　④飛騨高山（あぶらむの里）⑤沖縄の５つで、７月27日（火）～８月１日（日）に行われた飛騨高山コースには８人の５年生が参加してくれました。

１年以上の準備期間を経て迎えた本番。価値観の揺さぶりはいきなりやってきました。まずは着いてすぐのペローダ洗いです。タワシを使ってのバケット洗いはいつしか大人も子どもも関係なしの水かけ合戦に発展。それまでどこかにあった「教師」と「子ども」という関係を「あぶらむ共同体」へと進化させてくれました。体を拭くと今度はペローダに乗っての敷地めぐりです。はじめは「やめてー」「助けてー」と不安げだった子どもたちは、バケットが２度３度と上下に揺さぶられるうちに「もっと高く！」「もう一回！」といつしかそれを楽しむようになっていました。初日にあったこの二つの出来事は、どちらも「東京から持ち込んできた関係や既成概念はここでは通用しませんよ」ということを私たちに伝えるためのあぶらむ流の儀式だったように思います。

２日目からはいよいよ本格的な体験プログラムの開始です。石窯を使ってのピザ作りでは大郷シェフの指導のもと自分たちでピザを作り上げ、思う存分食べて大満足。午後の宮川筏下りでは、急流に流されては歓声をあげ、浅瀬に乗り上げては悲鳴をあげて、ワイワイと川遊びを楽しみました。

３日目に行われたツリークライミングは全員が初体験でしたが、苦労しながらもロープ１本で高い木に登れた爽快感は格別で、中には垂らした８本のロープ全部を制覇したつわものもいました。また博輔兄さんの指導で行われた木工作品作りは、家族の顔や自分の名前を題材にし、ゆったりとした時間と豊富な材料の中で大人も子どもも夢中になりました。

このほかにも肝試し、テント生活、川に湧く温泉での水遊び・・・と楽しいプログラムがたくさんありましたが、中でもいぶし山26kmナイトハイクは今回のハイライトだったと言えるでしょう。学校のハイキングはせいぜい４～５km程度ですから距離的だけでも大変ですが、それを夜に行うことで子どもたちにとっては一層学び深い体験となりました。東京に戻ってから書いてもらった子どもの感想文を通して、その時の様子をご紹介したいと思います。

「助けあったオーバーナイトハイク」

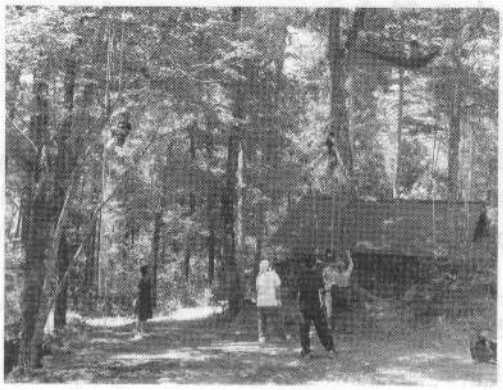
明石　真之介

ぼくはグローバル・エクスカーションで、飛騨高山・あぶらむの里に行った。引率の先生は西村正和先生と中村先生、参加する生徒はぼくも含めて８人だ。飛騨高山は自然が多く、空気がすんでいた。あぶらむの里には、立教大学でチャプレンをしていた大ごう先生がいて、いろいろな話をしてくれた。自分たちで生地から作ったピザをかまで焼いて食べたり、木工工作では兄弟の顔を作った。川では、いかだに乗って川を下ったり、ツリークライミングにも挑戦した。

その中で一番楽しかったのは、オーバーナイトハイク。真夜中、友だちと助け合い励ましあいながら歩いたオーバーナイトハイク。オーバーナイトハイクは７時頃あぶらむの里から始まり、西村先生のＡグループ、中村先生のＢグループに分かれて、いぶし山まで往復26km歩いた。はじめはＡグループと一緒に歩いていたけど、休けいを多くとったぼく達ＢグループはＡグループに先をこされた。でも、休けいをとり、のんびり歩いた方が何か発見があったりするから、ぼくは

この方が良かった。山道は石がいっぱいあるから、みんなで声をかけあって、協力しながら登った。上を見上げると、星がいっぱいあって、東京ではめったに見られない流れ星を生まれて初めて見た。テレビやプラネタリウムでしか見たことのない流れ星を見ることができて、とても感動した。水たまりをふんでしまったり、すべったりしたけれど、休けいしながらも歩いた。歩いて足に豆ができるくらいみんながん張って歩いた。そして頂上に着いた。Aグループはとっくに着いていたらしく、みんなお菓子を食べていた。頂上はとても寒かった。しかし夜景はテレビでも現実でも見たことがないほど美しい夜景だった。星もきれいだし、夜の町の光が、かがやいて見えた。BグループはAグループが行って、二十分くらいしてから下山した。下山は疲れないだろうと思っていたが、すべりそうになって足に力が加わって、とてもつかれた。だから下山の時も休けいをとった。そして下山する時ある条件をつけた。懐中電灯をつけてはダメという条件だった。真夜中だから真っ暗で、先が全然見えなかった。しかし月の明かりと、（上を見上げて）木はどうならんでいるかを見て、右にならんでいたら道ということを教えてもらったので、大変ではなかった。どんどん歩いていくと、目が慣れてきて、見えるようになった。最初真っ暗な道を通ると、夢を見ているように思えた。ぼくが一番こわかったのは、くらい所にある水たまりが道ではないように思えて、思わず足を止めてしまった。こわかったり、転んだり、色々なことがあったが、無事下山した。が、あぶらむの里までは2時間くらい歩かなくてはいけなかった。でもその前に、みんなで草にねっころがったり、星を見た。頂上より星が少なくなっていた。その時大学生のお兄さんが言った。「あれ金星じゃないかなぁ」見ると、下の方に、強く光る星があった。そして金星や流れ星を見ながら今までのことを思い出した。少し危険な所があったら「ここ少し危ないから注意して。」と声をかけあったり、疲れて帰りたいと言った人にお兄さんが「あと少しだからガンバレ。」とはげましてくれたから、ここにいるんだなと感謝した。休けいが終わり、あぶらむの里を目指した。歩いていくうちに明るくなり、朝になってしまった。ねむかったけれど、がん張って歩き、5時になって、ようやくあぶらむの里に着いた。Aグループは着いていたらしく、パジャマを着ていた。ぼく達もお風呂に入り、ぐっすりとねむった。頂上に着くまでは、本当に頂上なんてあるのかなと思うほどきつかった。でも、流れ星と頂上の夜景を見たときは喜びでいっぱいになった。そしてみんな無事にオーバーナイトハイクをやり遂げたことが、何よりも一番うれしかった。
このグローバル・エクスカーションで、山里の生活の楽しさ、自然のすばらしさを体験する事が出来た。今度は冬のあぶらむの里で、かまくらを作ったり、みんなで雪合戦をしてみたい。そしてまた大ごう先生や、大学生のお兄さん達に会いたい。

6日間を終えて、「人にしてもらって当たり前。きちんとお礼や挨拶ができない。嬉しい、おいしい等の感情表現が乏しい」といった子どもたちの課題、また「このプログラムを通して何を育てようとしているのかが明確でない」という学校としての課題も見えてきた今回のグローバル・エクスカーションでしたが、当初願っていた「自然ってすごい、自然って楽しい」という体験は、あぶらむのもつフィールドを使って思う存分出来たのではないかと思います。また見逃せないのが今回のプログラムや大郷先生との出会いを通して自分のあり方を考える機会を得たことではないかと思います。ナイトハイクで感じた光の有り難さや仲間の大切さ、ツリークライミングや木工作品作りで知った自分の新しい面、川や山で感じた自然の楽しさや厳しさ、スタッフや大学生のお兄さんお姉さんの優しさや思いやり・・・。そういう気づきや感動を子どもたちはしっかりと受けとめてくれたことでしょう。小学生時代の6日間に多大な期待は無用かもしれませんが、「学ぶことは変わること」。どこかでそれが彼らの人生につながり、違いを生み出していってくれることを願っています。
バナナって本当に滑るのかな？と言いながらテラスに置いたバナナの皮の上を滑ってみた子、朝から火をたいて礼拝をしたこと、ナイトハイクであとから来るチームに向かって叫んだ自分の声が山びこになってびっくりした子、ツリークライミングの休憩も返上して横の崖を駆け上るのに夢中だった子どもたち、温泉に浸かる大人をよそに自分たちの温泉作りに熱中した子どもたち・・・・。どれも素敵な瞬間だったなぁ。やっぱりあぶらむは、最高！



あぶらむツリークライミング

気持よさそうではないですか。楽しそうじゃないですか。キケンの一言で一蹴しないで下さい。大丈夫です。そして子供たちはこの緊張感から学ぶのです。

オーバーナイトハイキング

あぶらむの裏山一周26.4km真暗闇の中よく歩きました。明け方帰ってきたら子供たち全員別人格になっていた。暗闇から学ぶこと多いですね。

石窯でピザづくり

ファーストフードに慣された子供たち。スローフードの楽しさとおいしさを伝えることも大切なこと。

川下り

ホームセンターで売っているエアーマットがいかだに変身。子供はこうでなきゃー。

木でものづくり「ボクの家族」

林の中の木工房で家族の一人一人におもいを寄せながらつくりました。

いい笑顔だネ

ボクはアナウンサー志望です。その笑顔ならいけるヨ。茶の間を明るくしてくれヨ。

2004ネパールの旅に参加して

川上　美砂

ネパールに行ってみたい、息子たちと一緒に旅をしたいという、何年越しの夢がついにこの春かないました。息子が小学校の卒業式を終えたその日、ダッシュで関西空港に向かい、夫と娘と一番下の息子を残して日本を離れたのでした。大郷先生との旅は立教のキャンプ以来20数年ぶり、自分を見つめ直したいという思いもあっての参加でした。

カトマンズ空港に到着し、寺院の町を歩いていくと、川岸で遺体を焼いている光景に出合いました。泣く人あり、祈る人あり、そこで物を売って生活する人ありで、そのありのままの光景に日本から着いたばかりの私は驚きました。20数年前、フィリピンキャンプでマニラに着いたときを思い出しました。カトマンズを後にした翌日からは、大自然にどっぷり。象の背に乗ってゆらゆらと大草原を散歩、サイや熊に出合うと歓声をあげ、象の背中から見える草原の大きさに地球の大きさを実感しました。トリスリ川の豊かな流れに身を任せてボートで川を下るときには、川のしぶきのみならず、仲間のボートとバケツで水を掛け合って歓声を上げ、かと思うと激しい流れに一瞬仲間の一人の体が宙に舞い、次の瞬間には水に落ちるスリルを味わいました。（彼はもちろん無事で、この体験後なにかが吹っ切れたように見えました。）ワニが顔を覗かせる・・川では、小さな舟で下りながら、思わず『川の流れのように』を何人かで口ずさんでいました。川の穏やかさに抱かれているようなひとときでした。さらに、象の背中によじ登り、石でゴシゴシ象の肌を洗ったり、現地の子どもたちと川で飛び込みごっこをして遊んだり、子どもたちにとって忘れられない思い出になったようです。

そして、映像でしか見たことのなかった山脈・アンナプルナには、1995メートル付近まで歩いて登りました。私たちの荷物はネパールのたくましいポーターさんたちが背負ってくれました、笑顔で軽々と。しかし、彼らに重荷を背負ってもらっても、私たちの体そのものの重荷、つまり体重は自分で負って登り続けなければなりません。呼吸は苦しくなり、足は上がらない、先はまだまだ見えない、そんな重たい雰囲気を打ち破ってくれたのが、『笑い』でした。オナラの噴射パワーで登るぞ～と、何の科学的根拠もないことを大郷先生が言い出し、それに負けじと私の息子がオナラを連発。目的地までにどちらが回数で勝るかという、下品極まりないノリで、みんなで笑いながらゴールを目指したのでした。もちろん、登山中、美しい風景や険しい斜面に石段を作ったネパール人の努力に驚いたり、行き会う旅人や村の子どもたちの明るいナマステ！のあいさつの声にも励まされたりの道中でもありました。

ポーターさん、重い荷物でご苦労さん。どれほど重いのだろうか。かついでみたら一歩も動けなかった。これも体験学習。

山小屋にたどり着き、これがアンナプルナかと見廻した山の美しさ、ビールのおいしさは忘れられません。

冷たい透明な空気の中、一緒に登ってきた仲間の顔がみな輝いてみえました。大郷先生がこの場所でという夢を叶えたくて、日本から抱えてきたトランペットを取り出し、『アメージンググレイス』や『昴』を吹き、その音色が山々に響いたときには、言葉にならない感動で胸がいっぱいになりました。わたしも山に向かって歌いました。いえ、正直に言うと、ちっぽけだけど愛しい私自身に向かって両手をいっぱいに広げたい気持ちで歌っていたのです。そして夜が更けるまで私たちがネパールの人たちと一緒になって大宴会をしたのは言うまでもありません。

旅の途中、「ネパールってどう？」と二人の息子に聞いてみました。「生きてるって感じ。子どもも、そこらにいる鶏もあの足で走り回ってたくましく生きてるって感じがする」との返事。そして自分と同じくらいの女の子が土産物を買ってとしつこく寄ってきたときには「あの子も一生懸命生きているんだよね。でもどうして学校に行かないの？」「ぼくたちに何かできることはないの？」と。その質問は、私たちの生き方そのものを問うているように聞こえました。

そして今回ご一緒した人たちとは、旅の途中、たくさん話をしました。みんなそれぞれの思いで参加していました。仕事を辞めてきた人、自分探しをしにきた人、旅慣れたご夫婦は行く先々で助けてくれたり、楽しませてくれたりしました。5年前に参加し、今回は一人で参加した小学6年になる男の子もいました。そしてこの旅に何回もガイドとして関わってきて、他の旅では得がたいものを感じているからと全力でサポートしてくれたネパールの素敵な人たち、ウペさん、ホムさん。「政情が安定し、あなたたちを心から迎えられるような国にしたい」という言葉が心に残りました。そして、大胆な発想と細やかな配慮で旅を企画し、自らも「やっぱりネパールはいい！」と言う大郷先生。このメンバーでよく話し、笑い、涙もし、感動の12日間でした。途中、ストライキなどで道が塞がれ、緊張する場面もありましたが、ガイドさん達の機転で切り抜けられ、貴重な体験をすることができました。

あれから半年が経ちました。アンナプルナへの登りで一度も弱音を吐かずに黙々と登り続けたと拍手された下の息子は、毎日の小学校生活を淡々と楽しみながらがんばっています。中学生になり、サッカー三昧の上の息子は一番下の弟といつか一緒に行くと言っています。私は気持ちを整理し、新しい仕事に就きました。厳しい現実もありますが、今、それぞれが日常生活の旅人なのだとつくづく思います。いろんな人たちに支えられながらも、歩いていくのは自分自身だということ、そして生き方はどこかに探すものではなくて、自分の中に作っていくものなのではないかと感じています。旅の道中、人のせいにせず逃げないで歩いていけば、喜びに満ちた体験が、人や自然に出会うことができる。だから、生きていく自分にも未来にもまだまだ期待していこう、ネパールの旅を振り返って、そんな気がしているのです。

ゾウさんの水浴介助
石でゴシゴシ、ゾウさん気持よさそう。人間もついでに水遊び

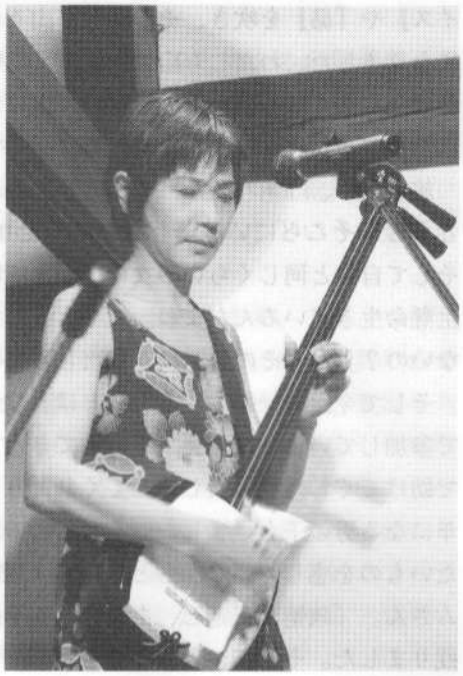
2005年 子供から大人までのネパールの旅

参加者募集

期　　間　2005年3月25日～4月5日
お問合せ　あぶらむの会まで

諸魂庵築　300年記念コンサート

諸魂庵と名づけられた飛騨の古い民家があぶらむにやってきて10年となった。建物もらいうけの話が出た時、築180年といわれた。移築に耐えるか少々心配だったがいただくことにした。解体してみてびっくり、大黒柱から棟札が出てきた。「宝永元年申申八月吉日」と記されていた。宝永元年は元禄17年、赤穂浪士の討入が元禄15年、富士山の大爆発でできた宝永山は宝永４年の出来事。宝永元年は1704年。この家は大原騒動という飛騨の百姓一揆などを見ながら300年生きてきた。盛大にお祝いをと四つのコンサートを企画実施した。



津軽三味線二代目高橋竹山　熱演

トップバッターは津軽三味線二代目高橋竹山さん。200名近い聴衆が彼女の熱演に魅了された。後日、竹山さんより最高級の響きをもった演奏会場とお褒めの言葉をいただいた。

九月に入り、中秋の名月とおわら風の盆、胡弓の響き。三回の開頭手術を克服された伯育男さんの渾身の演奏にからだがふるえた。荘川ソバの会の仲間が新ソバで華をそえてくれた。

10月に入り深草アキさんの秦琴コンサート、東京芸術大学教授杉木峯夫親子三人トランペットコンサート。天の恵みか戒めか、両方とも台風の影響をうけ聴衆者数は少々寂しかった。しかし、演奏はどちらも最高で、私個人としては杉木さんのカッチーニの「アヴェ・マリヤ」を聴いていたら涙が流れて仕方なかった。

杉木さんは高校時代の吹奏楽部の一年先輩。学校をサボって金沢まで映画を観に行くなど何かと問題行動の多かった私、杉木さんには沢山迷惑をかけた。東京芸術大学教授の外、サイトウ・キネン・オーケストラや水戸室内管弦楽団等々内外に渡って多忙であるにもかかわらず、出来の悪い後輩のためにはるばるかけつけていただいた。「アンコールは大郷、お前も一緒に吹くんだぞ」。先輩の命令は絶対、40年振りのトランペット、一年間の練習の成果として「おじいさんの古時計」を一緒に吹かせていただいた。とっても緊張しました。ハイ

杉木峯夫親子三人トランペット演奏会。
アンコールでは4本トランペットとなりました。

2004年あぶらむ　この一年

1月・あぶらむ雪祭（10日～12日）
2月・南山大学人間関係学科ゼミ合宿
・あぶらむの宿増築工事開始
・沖縄ナザレ修女会、愛楽園訪問
・昨年よりも一段と暖冬気味（最低気温－11℃）
3月・春一番の会
・高山日赤看護専門学校最後の卒業式（閉校）
・茨木キリスト教大学卒業礼拝講話
・第８回子供から大人までのネパールの旅
4月・JA岐阜厚生連看護専門学校新入生オリエンテーションキャンプ
・第11回さくら道国際ネーチャーラン（名古屋－金沢250km）
・あぶらむツリーハウスワークショップ
5月・東海バプテスト連盟研修会
・田植え（16日）
・諸魂庵築300年記念コンサート開始　　津軽三味線２代目高橋竹山コンサート
6月・ゲシュタルト・セラピー研修会
・沖縄県人会
7月・韓国生協団体あぶらむ訪問団
・岐阜生と死を考える会研修会
・立教大学生フィリピンキャンプ合宿
・立教小学校「自然の中でおもいっきり」プログラム
8月・各種夏季キャンプ
（岐阜バプテスト教会、芦屋聖マルコ教会、名古屋穂積バプテスト教会）
・立教新座中高里山体験プログラム
・第６回あぶらむの里自然体験プログラム「森の恵み」
9月・高山日赤病院看護部研修会
・川崎いのちの電話研修会
・稲刈り（18日）
・諸魂庵築300年記念コンサート第2弾　　おわら風の盆胡弓演奏会と荘川村手打ソバ
10月・諸魂庵築300年記念コンサート第3弾　　深草アキ秦琴コンサート
・脱穀（７日）
・台風23号直撃
・市川聖マリヤ教会男子会あぶらむ訪問団
・諸魂庵築300年記念コンサート第4弾　　杉木峯夫親子三本トランペットコンサート
11月・逝去者記念式（１日諸魂庵にて）
・加藤拓、美樹結婚式
・ツリーハウスワークショップ
・韓国メソジスト農村神学院一行来里
・味噌用大豆、白菜、大根等、冬用野菜収穫
12月・６日初雪
・本格越冬準備開始
・あぶらむ通信発送
・19日あぶらむクリスマス会

※2005年　どうぞよいお年をお迎え下さい

本年２月１日より町村合併により住所表記が **〒509-4121 高山市国府町宇津江** となります。

寄付者一覧（'03年11月29日～'04年12月5日）

東京聖テモテ教会奉仕会／祈りの家教会／又吉亀治／森田トミ／金子美弥子／杉浦敏行／山崎俊樹／佐口哲／寺西裕子／谷昌二／富永隆史・敦子／紅林みつ子／熊谷一網／森本光生／鈴木武次／小野翠／神田キリスト教会／大塚信一・梅子／高島富美江／東野光男／俵里英子／田島義信／平野淳子／松本信代／和田恵子・斎藤洋明／清水秀明・美保子／一柳百／植木友里江／聖フランシス及びエリザベツ礼拝堂／菊澤満喜子／財満研三郎・由美子／坂井瑩子／安藤実・陽子／本田りん／梶原恵理子／市川聖マリヤ教会／溝際庸介／鈴木眞喜子／宮古聖ヤコブ教会／三原一男・京子／近藤真紀／高瀬留美／青柳真知子／福岡女学院中学高等学校宗教部／立教新座中学校ボランティアグループ／谷章子・こころ／窪寺敏之／金城由美子／畑井正春／池崎純一／常見幸代／菊間みどり／佐々木亜子／上田敏明／鵜川雅行／木村季子／武原誠郎／松井明子／渡辺直明／高野アサノ／柴田良子／平野幸男／前田容子／鈴木茂男／相川喜久枝／久田知行・広子／高畑謡子／武藤六治／友沢加代子／川崎東介／趙神父／大槻カズ子／土師晴子／松尾正枝／加倉井佳子／林賢之輔／中村芳枝／坂本吉弘／佐藤明子／橋岡加都子／鮫川哲郎／芦屋聖マルコ教会教会学校一同／畑野榮一・寿子／立教新座サマーキャンプ／坂本敦子／杉木峯夫／栗山盛雄／加藤正／市川聖マリヤ教会男子会／梅沢栄・雪子／田尾丘二／東京セント・ポール・ライオンズ・クラブ

新規会員（'03年11月29日～'04年12月5日）

鈴木眞喜子／古川秀明／河瀬正子／三瓶富子／浜村洵／寺谷恵美子／澤野弥生／丸山千早／丹安喜子／亀山佳伯／升本啓二郎／丸山富子／前田容子／大平和子／前田晃伸／斎田美代子／矢羽伸子／田中孝子／細野満子／筑井宏子／中山美世子／時高照子／鈴木冴子／太田鉄也／島袋洋子／佐藤芳子／山内寿美子

《「あぶらむの会」について》

「あぶらむの会」は旧約聖書創世記に出てくる、信仰の父アブラハムの旅立ちの前の名前、「アブラム」に由来しています。それによれば、彼はその内的必然性故に、安住の地を離れて「行く先知らずして」旅立ちました。全てに対してあまりにも安定を求める今日、私たちは旅としての人生に臆病になり、旅に必要な能力を欠いているように思われます。

「あぶらむの会」は、自己の人生に果敢に挑戦し、人生の良き旅人を育てるため、それに必要な訓練や出会いの場を提供してゆくことを目的としています。